公認心理師の資格をもつ ガイダンスカウンセラーの実践 11

教育・心理・福祉の視点をいかした スクールソーシャルワークの実践から

東久留米市
スクールソーシャルワーカー
宮下（みやした） 佳子（よしこ）

はじめに

筆者は現在、スクールソーシャルワーカー（以下SSW）として仕事を始めて六年目になります。SSWは福祉職と言われていますが、福祉の資格はもっていません。もっている資格は、教員免許（小学校・幼稚園）、学校心理士、特別支援教育士、ガイダンスカウンセラー、公認心理師（取得順）です。子育てをしながら大学院（教育学）で学んだあと、適応指導教室指導員（十二年間）、スクールカウンセラー（小学校、中学校合わせて十年間）、特別支援教室巡回相談心理士（現在四年目）の仕事をしてきました。また、短期間ですがフリーアナウンサーとして仕事をした経験から、大学の教職課程で「話し方講座」の特別講師（十年間）を担当しました。現在は別の大学で非常勤講師として「ソーシャルワークと教育支援」の授業を担当し（現在三年目）、発達障害の基礎理解を中心に現場で必要な力（知識や技術）を若い皆さんにお伝えしているところでもあります。

教育、心理、福祉の仕事にかかわらず、どの分野でも、目指す仕事に就くためには資格取得がスタートになる場合もありますが、それまでの職業経験の結果として、それらの仕事につながることもあるのではないかと考えています。資格と職域の問題は、これまでも、そしてこれからも大きな課題であるととらえていますが、大事なことは資格よりも資質、とくにスクールカウンセラー（以下SC）やSSWには経験やセンスも問われるのではないかと思っています。少なくともSSWは、教育、心理、福祉等、何らかの資格と福祉分野への興味、関心、意欲があればできる仕事だと確信しています。それは〈寄り添い、見守り、つなぐ〉という支援をしていくうえで、それぞれのバックグラウンドや特技などの強みを活かすことができると感じているからです。

1 専門職としてのSSWの仕事

SSWとして関わるケースの主訴としては①不登校や登校渋り、②人間関係のトラブル、③家庭環境の問題（養育力不足、虐待、貧困、保護者の病気等）がほとんどで、その背景には、発達の特性や二次障害、精神疾患、学習困難などに課題がある場合も多いと感じています。SSWとして介入することで、困っていることを整理し、専門機関や関係機関につなぐことにより、少しずつうまくいくよう支援しています。

SSWに求められる力としては、アセスメント（状況から見立てをし、手だてを考える）と対応力です。実現可能な目標や具体的な支援方法、適切なときに適切なところにつなぐという支援計画をたてることや、振り返りや見直しも大事だと思います。また、SSWは学校の依頼で介入することも多いため、学校のニーズを把握することも重要だと考えています。

筆者は「専門職は現場で役に立たなければいけない」「失敗は許されない」ということを、常に、強く、心がけて仕事をしてきました。まずはSSWとしてできることや、支援に関する情報や方法、アイデアを伝え、学校に信頼されること、子どもに信頼されること、保護者に信頼されること、そして専門機関（医療機関等）や関係機関（児童相談所や子ども家庭支援センター、民生・主任児童委員等）にも信頼されることが大事だと考えています。ときには長期的な支援になることもお伝えしています。

また自分のネットワークやフットワークを使って丁寧に仕事をしていくことが次の支援につ

ながっていくのだと思います。リピーターになってもらうことが目標になり、「この人に相談してよかった」「安心できた」「こうすればよいとわかった」「またお願いします」などと声をかけてもらえることが、筆者自身の喜びとなり、しんどいながらも毎日走り回る日々にいたっているのだと感じています。

2 SSWと「チーム学校」

SSWは学校現場で仕事をすることも多く、学校を理解していることが何より重要です。SCにしてもSSWにしても、スクールという冠がつくことの意味をしっかりととらえて仕事をすることが求められています。今後「チーム学校」として進んでいくとき、専門職として対等な立場で教員とお互いにリスペクトし合いながら連携していくためには、SCやSSWなどの専門職が十分に学校を理解していなければ《わかり合うこと》《支え合うこと》《解決すること》はむずかしいのではないでしょうか。例えばケース会議で、校内支援体制を構築する場合、教材研究や学校行事など教員の忙しさ（校務分掌や主任などの立場も含め）やプライベート（子育て中、ステップアップのための勉強中等）に考慮しながら役割分担をすることが負担感を軽減し、皆で取り組んでいこうという意欲につながっていくと感じています。担任や特別支援教育コーディネーターがいつも重責を担うことになると、疲弊する教員が増える一方と言わざるをえません。昨今、教員の働き方改革が話題になり、退勤時間などが決められるようになっていますが、まだまだ教員の仕事量は多く、大変だと感じています。教員の負担を減らし、情報や感情を共有することで解決に向かうことができれば、学校がSCやSSWなど専門職と連携しようという意欲につながるのではないかと思います。今後「チーム学校」として学校の中で仕事をすることの意味は大きいと期待しています。「子どもの最善の利益」を意識しながら、子どもや保護者だけでなく、教員も安心して生活できることがSSWとしての腕の見せどころなのではないかと考えているからです。

SCが全国の学校に配置されてから二〇年以上の月日がたち、かなり認知されてきました。一方、SSWは二〇〇八年から導入されており、まだ半分の時間しかたっておらず、「実績も待遇もまだ半分?」と言えるかもしれません。筆者が勤務する自治体でも二〇〇八年からSSWが配置されましたが、「何をしてくれるの?」「いつ頼めばいいの?」「保護者や子どもにどう説明すればいいの?」など、職務内容や介入のタイミング、SSWを子どもや保護者につなぐ方法などを繰り返し質問されることがまだまだ多いと感じています。校長会でのあいさつや学校訪問、教員研修等での啓発活動にも、積極的に取り組んでいるところです。

おわりに

SSWとして、教育、心理、福祉の視点から困難さにアプローチしていくとき、カウンセリングやコンサルテーション、コーディネート機能を担うことがあります。今後は学校内外で専門職や専門機関や関係機関、地域の資源（子ども食堂や学習支援等）と連携する《多職種連携》もますます進んでくると思われますが、ケース介入のスタートから終結するゴールまで、時間がかかるそのプロセスの苦労も成果も共有しながら、総合的に支援することも大事になると考えています。また、学校では「こまったちゃん（問題行動）」「かまってちゃん（愛着課題）」が多いと言われていますが、表面的にはなんの問題もないように見える「しずかちゃん」の困り感に気づくことも大事だと考えています。

心理と福祉を線引きするのではなく、双方の視点を活かして総合的に支援ができる専門職という感覚も、常に意識しています。それが公認心理師資格をもつガイダンスカウンセラーの目指すべき姿のようにも思え、令和元年度の採用試験から導入された名古屋市の試み「なごや子ども応援委員会では、総合援助職としてSCとSSWの区別なく採用する」ことにも大いに注目しています。

学校には多くのチャンスがあり、新しいチャレンジができ、さまざまな力をチャージすることができる場所でもあります。まさに「学校チャ・チャ・チャ」です。子どもたちが安心して成長していけるよう、これからも微力ながら支援していきたいと思っています。